「算数科における、ICT を効果的に活用した個別最適な学習の実現」
～全ての児童に確かな計算技能を獲得させることを目指して～

米澤　正展
（精華町立川西小学校）

1　現状と課題

本校は、児童数 453 名、20 学級（うち特別支援学級４学級）の中規模校である。校区内には、旧村地域と新興住宅地が混在し、生活保護世帯・準要保護世帯の割合は、全体の 15%となっている。児童の学力実態は、各種学力調査の結果と比較すると、現４・６年生が全国または府平均を下回っている。また、児童間の学力格差が大きく、全ての学年で低位層の底上げが大きな課題となっている。今年度のスクールマネジメントでも、学力テスト等の正答率が、全国（府）平均の 50%以下（２年生ならば全国平均 78 点なので 39 点以下）の児童の割合を、全体の３%以内にするという方針を掲げているが、実態は以下のとおりである。

【令和４年度テスト結果（算数）〈経年比較〉】
（２・３・５年標準学力テスト、４年京都府学力診断テスト、６年全国学力学習状況調査）

２年生	H29	H30	H31/R1	R2	R3	R4
学年平均	83.1	80.7	87.5		84.5	83.2
全国平均	83.6	82.2	84.8		83.0	78.0
差	-0.5	-1.5	2.7		1.5	5.2

３年生	H29	H30	H31/R1	R2	R3	R4
学年平均	78.4	76.5	75.8		75.8	78.2
全国平均	76.7	74.4	74.5		75.5	73.9
差	1.7	2.1	1.3		0.3	4.3

４年生	H29	H30	H31/R1	R2	R3	R4
学年平均	65.2	67.5	64.6		64.1	**55.7**
府平均	68.5	69.4	68.6		64.2	**64.2**
差	-3.3	-1.9	-4.0		-0.1	**-8.5**

（R4 は、R３のテストを用いた値）

５年生	H29	H30	H31/R1	R2	R3	R4
学年平均	73.8	70.7	72.5		65	63.4
全国平均	72.5	64.8	67.3		65.3	60.4
差	1.3	5.9	5.2		-0.3	3.0

６年生	H29	H30	H31/R1	R2	R3	R4
学年平均	85.0	58.0	67.0		72.0	**61.0**
全国平均	78.6	63.5	66.6		70.2	**63.2**
差	6.4	-5.5	0.4		1.8	**-2.2**

現４年生は-8.5 ポイントと大きく平均値を下回っており、特に学力向上の取組を重点的に行う必要がある学年だといえる。

【学年別全国（府）平均の 50%以下の児童の割合】

	２年	３年	４年	５年	６年	全体
５０%以下の児童の割合	1%	1%	26%	5%	17%	10%

また、家庭の教育力も大きな課題の１つである。家庭全体の生活習慣の乱れや宿題等の家庭学習への関心の低さ、文化的体験の少なさなど学力を下支えする力の弱さが、児童の学力不振や学習習慣の未定着、持続力の欠落につながっているケースも数多くみられる。そのため、本校では伝統的に「学校が学力保障の砦」という意識を常に教職員が持ち、人権教育の視点からも学力充実に力を入れている。全ての児童に確実に基礎学力を身に付けさせることで、学ぶ意欲や自己有用感の向上を図っていきたいと考える。

２　実践の内容

上記の実態を踏まえ、今年度から算数科において各学年段階で確実に身に付けさせたい計算技能を系統的に設定し、全ての児童に「できる喜びと自信」を持たせることを目指していくこととした。そのためには、個々の児童が個々の習熟度に応じた計算練習を継続的に行える学習機会を設定していく必要がある。そこで、タブレットドリルを効果的に活用し、これまでのプリント学習では実現が難しかった個別最適な学習の実現を目指していきたいと考え、本研究を進めているところである。

（具体的な目標）

① 各学年での重点獲得技能の系統表を作成する。
② 全ての学年で、重点獲得技能の達成率 95%以上を目指す。
③ 計算に苦手意識を持つ児童が、肯定的な意識に変容する割合を 50%向上させる。

（目標達成のための方策）

（１）重点獲得技能の設定と毎月の達成度調査実施

全ての児童に確かな計算技能を獲得させるためには、系統的な学習と個々の児童の理解度に応じた個別支援が必要である。そこで、各学年段階で全員の児童に必ず身に付けさせたい重点獲得技能を設定し、毎月の達成度調査で個々の児童の到達度を明らかにすることで、必要な個別支援が行えるようにした。

（重点獲得技能の設定基準）
・今後の学習に必須の内容であること
・毎回の授業で実施可能な設定時間であること（3 分間）
・技能を習得できた（自由自在に使いこなせる）とみなす正答数であること

また、今年度設定した各学年段階での重点獲得技能の妥当性を検証し、川西スタンダードとして系統表を作成する予定である。それにより、本研究が来年度以降も学校の財産として有効活用され、全児童の計算力向上と、できたという達成感や自信につながると考えている。

【各学年段階における重点獲得技能】

学年	1学期	2学期
1年	設定なし	たし算・引き算 3分間で20問
2年	繰り上がりのある足し算の筆算 3分間で20問	繰り下がりのある引き算の筆算 3分間で18問　※11月から九九
3年	九九を使ったわり算（余りなし） 3分間で20問	九九を使ったわり算（余りなし） 3分間で20問
4年	2桁×2桁の掛け算の筆算 3分間で10問	3桁÷2桁の割り算の筆算（余りなし） 3分間で10問
5年	3桁÷2桁の割り算 3分間で5問	3桁÷2桁の割り算 3分間で5問
6年	小数÷小数の筆算 3分間で15問	小数÷小数の筆算 3分間で15問

（2）タブレットドリルの活用による習熟度別学習

本校では以前から算数の授業開始5分を活用し、ウォーミングアップ（以下W-up）として計算練習を行っていた。毎日継続することで一定の計算力向上は見られたが、プリントで行っていたため、課題の大きい児童や計算力の高い児童には十分に適した課題とは言えなかった。

そこで、今年度から3年生以上のW-upを下記のタブレットドリル（ひまわりポケットのデジ計…写真①～③）を活用して行うこととした。タブレットドリルを使うメリットとしては、「正否が瞬時に分かり、従来の丸つけ時間が短縮できること」、「児童が自身の課題に応じて難易度を設定できること」が挙げられる。ICTをうまく活用することで、「本来の学習内容に使える時間の確保」、「間違いをすぐに次の問題に生かせる学習スタイル」、「児童の学習内容の個別最適化」を実現することができるようになった。

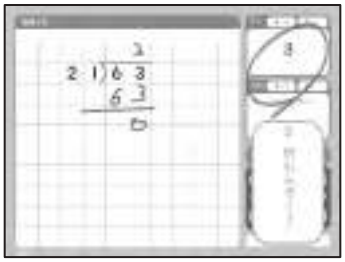
（写真①）

【課題に応じた問題選択】

（写真②）

【問題数と時間設定】

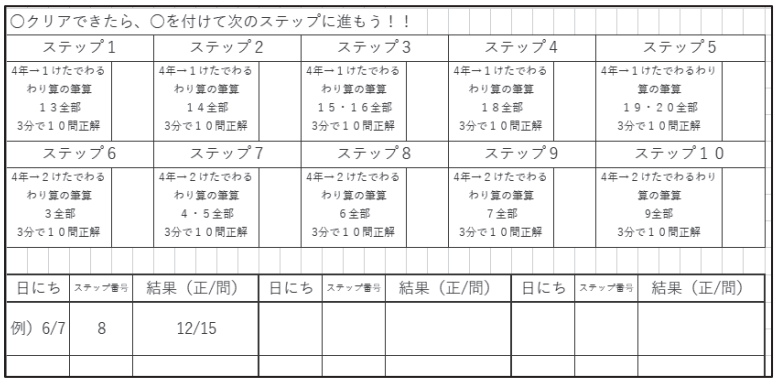
（写真③）



【自動採点】

しかし、結果を記入して学習の足跡を残す W-up シートは紙媒体を活用している学年が多い。本校の４年では写真④のシートを活用し、個々の児童が自身の成長を実感し、課題意識を持って主体的に W-up に取り組めるようにしている。そして、W-up が終わり、正答数が増えて喜ぶ児童には「努力の成果が身を結んだね」、伸び悩みで落ち込む児童には「今は力を積み上げている時期だから大丈夫」という様に、シートを提出する際に行うフィードバックを重要視している。これらは、児童が課題意識を持って計算練習に取り組める仕組みづくりと、個々の児童の実態に応じた細やかなフェードバックによる意欲喚起を目的としている。その積み重ねが、児童の主体的な学びにつながっていくと考える。これは、結果を集計ソフトで一斉送信する方法では難しい。ICT とアナログのメリットをうまく活用し、目的に応じて使い分けることが重要である。

（写真④）



○クリアできたら、○を付けて次のステップに進もう！！

ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5
4年ー1けたでわる わり算の筆算 １３全部 3分で１０問正解	4年ー1けたでわる わり算の筆算 １４全部 3分で１０問正解	4年ー1けたでわる わり算の筆算 １５・１６全部 3分で１０問正解	4年ー1けたでわる わり算の筆算 １８全部 3分で１０問正解	4年ー1けたでわるわり算の筆算 １９・２０全部 3分で１０問正解
ステップ6	ステップ7	ステップ8	ステップ9	ステップ１０
4年ー2けたでわる わり算の筆算 3全部 3分で１０問正解	4年ー2けたでわる わり算の筆算 4・5全部 3分で１０問正解	4年ー2けたでわる わり算の筆算 6全部 3分で１０問正解	4年ー2けたでわる わり算の筆算 7全部 3分で１０問正解	4年ー2けたでわるわり算の筆算 9全部 3分で１０問正解

日にち	ステップ番号	結果（正/問）	日にち	ステップ番号	結果（正/問）	日にち	ステップ番号	結果（正/問）
例）6/7	8	12/15						

課題をステップ制にすることで、自分の計算力に応じた W-up ができる。また、ステップをクリアするごとに○をつけていくことで達成感を感じることができる。

（３）計算に関する意識調査の実施

W-up による重点技能獲得の取組が、児童の「できる喜びと自信」にどの程度つながっているのかを把握し、取組の充実・改善につなげていくため、計算に関する意識調査を各学期に１度アンケート形式で実施している。「計算が好き・きらい」、「計算が得意・苦手」という項目で児童を４グループに分類し、それぞれに効果的なアプローチを行えるよう、学力充実部を中心として、仕組みや支援のあり方を検討している。

【計算に関する意識の肯定・否定グループ】

○計算が得意だし好き・計算が苦手だが好き→計算に対して肯定的意識を持つグループ
▲計算が得意だが嫌い・計算が苦手だし嫌い→計算に対して否定的意識を持つグループ

⬇ 実態を把握し、効果的なアプローチを行うことで…

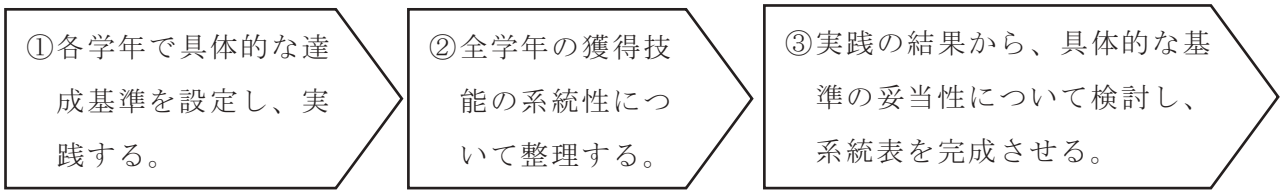
（具体的な目標）

③計算に苦手意識を持つ児童が、肯定的な意識に変容する割合を 50％向上させる。

→例えば、年度当初に否定的なグループの割合が全体の３０％だった場合、年度末には１５％まで減少させることができれば目標達成とする。

3　成果と課題

①各学年での重点獲得技能の系統表作成について



→ 重点獲得技能に関する「川西スタンダード」の完成

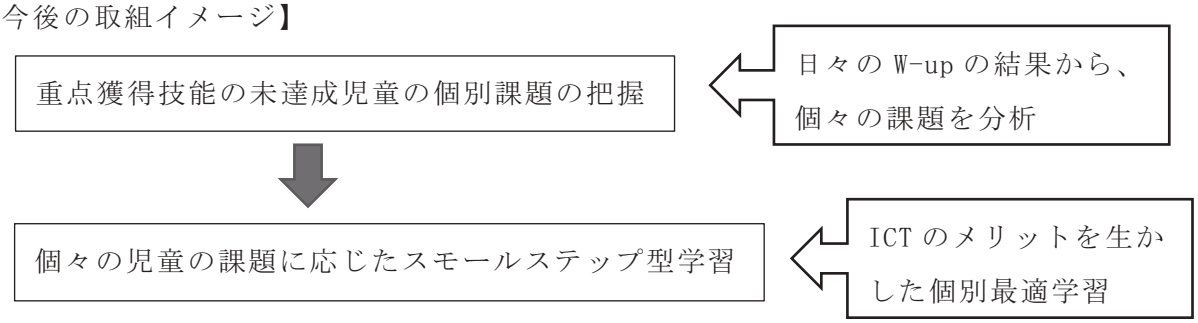
各学年が具体的な基準を設定し、全学年が一致して実践を行えていることが成果として挙げられる。今後は上記の図の②と③について、学力充実部を中心として行っていきたいと考えている。計算技能向上に関する取組がどのクラスでも系統的に実施できる仕組みを確実に構築し、来年度に確実に繋いでいきたい。

② 全学年での重点獲得技能達成率 95%以上の実現について

	１学期（５月→７月）	２学期（９月→11 月）
１年	設定なし	85%→92%
２年	93%→100%（達成）	64%→71%
３年	48%→75%（未達成）	54%→75%
４年	23%→60%（未達成）	68%→89%
５年	33%→58%（未達成）	50%→57%
６年	１%→54%（未達成）	32%→56%

継続して W-up に取り組むことで、全学年で着実に計算力が高まってきていることが成果として挙げられる。しかし、具体的な目標として年度当初に掲げていた「②全ての学年で、重点獲得技能の達成率 95%以上を目指す」については、ほとんどの学年で未達成というのが現状である。未達成の要因の一つとして、学年が上がるにつれて、これまでの積み残しが定着率の低さにつながっていることが挙げられる。引き続き、毎日の W-up を継続することで地道に力を積み上げていくとともに、個々の児童に応じた計算力アップのための手立てを講じるなど、個別最適な学習の実現を図っていきたい。

【今後の取組イメージ】

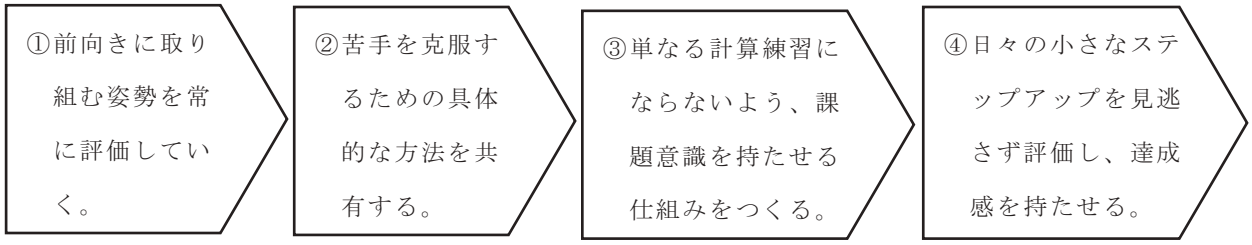


③ 計算に苦手意識を持つ児童の肯定的な意識変容（50%向上）について

6月→10月	①得意だし好き	②苦手だが好き	③得意だが嫌い	④苦手だし嫌い	割合
低学年	48%→54%	25%→14%	15%→20%	11%→12%	－23%
中学年	37%→34%	24%→22%	24%→22%	16%→21%	－７%
高学年	18%→21%	16%→16%	22%→24%	43%→39%	３%

高学年で若干の肯定的意識変容が見られたが、低・中学年では逆に否定的な意識を持つ児童の割合が増えた。要因としては、①十分に重点獲得技能が身に付いておらず、計算に対して肯定的な意識を持てる状況になっていない、②児童が自ら課題を設定し、課題解決に向けて主体的に計算練習に取り組むような仕組みをつくれていないといった点が考えられる。また、学年が進むにつれて、計算に対して否定的な意識を持つ児童の割合が増える傾向が見られた。これらの結果を踏まえ、肯定的な意識（得意だし好き・苦手だが好き）を高めていくために、それぞれの層に応じた適切なアプローチを講じていきたい。

【４つのグループに対するアプローチ】



４　おわりに

本校児童の学ぶ意欲と自己有用感の向上を目指してスタートした本取組は、まだまだ道半ばである。現在、初年度の成果と課題を踏まえ、来年度に向けた方策を学力充実部が中心となって検討している。この取組を実のあるものとし、ねらいを達成していく上で重要なことは、①教職員が取組の理念を共有し、②客観的指標に基づいた分析による取組の充実・改善を行い、③全ての学年でねばり強く取組を継続していくことだと考える。幸い、本校には、「学校が学力保障の砦となり、児童が未来を切り開く力を身に付けさせる」という教職員文化が伝統として根付いている。今年度の財産をうまく活用しながら、まずは３年間じっくりと腰を据えて取組を継続させていきたい。そして、すべての児童が「できる喜びと充実感」を感じながら日々の学習に向かっていける状況を実現させたい。

授業時数特例校としての取組
将来の生き方に繋がる伝統文化教育

校長　岩田　智典
京都市立東山泉小中学校

１．学校概要

本校は、京都市東山区にあり、東山三十六峰の今熊野山、泉山（月輪山）を仰ぎ見る地域に位置している。校区には泉涌寺、東福寺といった寺社仏閣があり、京都の伝統産業「京焼・清水焼」の窯元が多く残るなど、歴史と伝統を感じる町である。

平成 26 年 4 月、一橋、月輪、今熊野の 3 小学校と月輪中学校とを合わせた 4 校が統合し、5・4 制施設併用型小中一貫教育校として開校した。平成 30 年 4 月から義務教育学校となり、今年度で開校 9 年目を迎えている。本校は、義務教育 9 年間を 2 つのステージに区切り、西学舎と東学舎の２つの学び舎を併用する形をとっている。1 年生から 5 年生までは 1st ステージとして西学舎で、6 年生から 9 年生までは 2nd ステージとして東学舎で学んでいる。

【西学舎】

西学舎と東学舎とは、緩やかな坂道である泉涌寺道をたどって東西方向に約 750m の距離がある。二つの学舎は離れてはいるものの、義務教育学校として、1st ステージの 5 年間と 2nd ステージの 4 年間を繋ぐこと、前期課程と後期課程を繋ぐこと、東西の学舎を繋ぐことなど、様々な“繋ぎ”を強く意識して教職員が一丸となって日々の取組を進めている。しかし、なによりも繋がなくてはならないのは、子どもたちの 9 年間の学びである。一人一人が未来に向かって羽ばたく力を培うため、開校時には「意欲をもって学び、自らの将来を拓く児童・生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、授業改善、そして組織・運営などの学校全体の改善を進め、教育活動の充実を図ってきた。

開校６年目（令和元年度）を迎えるにあたり、学校教育目標の達成状況について教職員で話し合う機会を設けた。開校時に掲げた学校教育目標に対して一定の成果が得られたと評価し、教育活動を発展させるべく、新たな学校教育目標の作成に取り組んだ。児童生徒の実態を分析し、平成 29 年告示学習指導要領で示された育成を目指す資質・能力を踏まえ、開校６年目からの新たな学校教育目標として「人との関わりの中で、真の逞しさを身につけた児童生徒の育成」を掲げた。人と関わり協働する中で、義務教育修了後、社会の一員として逞しく生き抜いていくことができる力を育成することを目指して、日々の教育活動を推進している。

【東学舎】

２．授業時数特例校として

本校は、今年度、文部科学省「授業時数特例校制度」による特例校、ならびに京都市教育委員会「カリキュラム・マネジメント実践研究事業」の実践研究校の指定を受け取組を進めている。「授業時数特例校制度」とは、学校が設置されている地域の実態に照らし、カリキュラム・マネジメントに係る学校裁量の幅を拡大させ、教科横断的な視点に立った資質・能力の育成や探究的な学習の充実等に資するより効果的な教育を実施するため、地域の特色を生かして、教科等ごとの授業時数の配分の変更による特別の教育課程を編成して教育を実施することができる制度である。

本校の校区には、室町時代に能を大成させた観阿弥・世阿弥が、世に出るきっかけとなった猿楽を演じた場所“新熊野神社”がある。また、能「舎利」に描かれている物語の舞台となった“泉涌寺”は、本校東学舎のほど近くに位置している。これらの地域素材を活用し、日本の伝統芸能である「能」について探究的に学習することを通して、教科横断的な視点に立った資質・能力の育成とカリキュラム・マネジメントの充実を図ることを目的とした特別の教育課程を編成することとした。具体的には、8 年生の学年で、国語科（年間授業時数 140 時間）から 9 時間、社会科（年間授業時数 105 時間）から 6 時間、計 15 時間を音楽科（年間授業時数 35 時間）に上乗せし、8 年生の音楽科の授業時数を年間 50 時間として、夢創（総合的な学習の時間）とも関連付けながら、年間計画（下表）のもと取組を進めることとした。

令和４年度　文部科学省指定「授業時数特例校」　京都市教育委員会指定「カリキュラム・マネジメント実践研究事業」
研究指定に関わる取組 年間計画

京都市立東山泉小中学校

月	取組内容	取組の具体				音楽時数	月
		生徒	教職員	吉浪壽晃氏	地域・保護者		
４月	■日本の伝統芸能について知る。 ・能、歌舞伎、文楽などがあることを知り、その中の歌舞伎について学習する。 ・歌舞伎鑑賞教室（南座）に参加し鑑賞する。	・学年集会等で概要説明	・職員会議での共通理解（適宜）	・謡う部分の相談 ・お手本動画の撮影	・泉だより→概要周知 ・泉涌寺と打ち合わせ	3	４月
５月		・歌舞伎鑑賞教室（5/17）		・能について講演（5/24③④）	・学校運営協議会（5/27） →概要説明・協力依頼	6	５月
６月	■能について学ぶ。 ・能「船弁慶」を教材として歌唱・鑑賞の授業を行い、背景との関わりを意識して能のよさや美しさを味わう。 ・能の歴史や由来について情報収集をする。（書籍，インターネット） 新熊野神社…歌舞伎が世の中に広まるきっかけとなった場所 泉涌寺…能「舎利」の舞台となった場所					3	６月
７月		・歌唱，鑑賞の学習「船弁慶」 ・能についての情報収集 →書籍、インターネット等			・泉だより →１学期の学習内容紹介	4	７月
８月		・能についての情報収集 →書籍、インターネット等				2	８月
９月	■能「舎利」について学ぶ。 ・舎利の舞台となった泉涌寺を見学し、お話を聞く。 ・能「舎利」を教材として鑑賞の授業を行い、「舎利」のよさや魅力を味わう。 ■能「舎利」の謡（抜粋）を謡って、８年生全員での「大連吟」に取り組む。 ・能楽師からのお稽古（複数回） ・謡の特徴を意識して謡えているか、自分たちの演奏を振り返りながら意見交流をするなどして、技能を身に付け、豊かな表現を目指す。 ・能「舎利」についての解説を作成する。（解説書、ポスターなど）	・泉涌寺見学、お話を聞く ・鑑賞の学習「舎利」 ・謡おけいこ１ ・大連吟実行委員会結成	・大連吟実行委員会指導	・謡おけいこ１ (クラス・9/21②③④)		5	９月
１０月		・謡おけいこ２・３ ・大連吟発表準備	・大連吟実行委員会指導 ・国語、美術との連携	・謡おけいこ２ (クラス・10/7②③④) ・謡おけいこ３ (学年・10/25)	・学校運営協議会 →報告・協力依頼	6	１０月
１１月	■「大連吟」を披露する。 ・研究報告会で、児童生徒、保護者、地域の方々に８年生全員で大連吟を披露する。	・研究報告会での発表（11/3）			・研究報告会（11/3）	3	１１月
１２月	■大連吟での演奏を振り返り、今までの学習を通して学んだことを児童生徒、保護者、地域の方々に発信する。 ○「みんなで「舎利」を謡おう！」プロジェクトを実施する。 ・声の出し方、謡い方のコツ、「ここがかっこいい！」などを記入したオリジナルの謡本や、謡い方を解説する動画などを作成し、それを使って他学年の児童生徒に謡を教えて、東山泉の児童生徒に能の魅力を伝える。 ・謡っているところを撮影し、「みんなで「舎利」を謡おう！」プロジェクト動画を作成して、オリジナルの謡本とともに、保護者や地域の方々に見てもらえるようにする。 ○能の歴史、能の魅力、地域とのつながり、社会の中での能（伝統文化）の価値、自分とのかかわりなど、これまで学んできたことをまとめ、発信する。	・能楽堂での学習		・能楽堂での公演（12/21PM） →能舞台見学、能楽体験 謡レベルアップ、舎利鑑賞	・泉だより →２学期の学習内容紹介	5	１２月
１月		・発信準備 →謡本作成 →動画制作		・謡本、動画への助言		4	１月
２月		・発信活動 →他学年児童生徒へ →保護者・地域へ			・学校運営協議会 →報告・協力依頼	5	２月
３月		・学習のまとめ			・泉だより →３学期の学習内容紹介 取組報告	4	３月

３．育成を目指す資質・能力

この取組を通して育成を目指す資質・能力を、以下のように設定した。

知識・技能	日本の伝統や文化のよさや美しさに気づき、価値を理解する力
思考力・判断力・表現力等	伝統文化の本質的な価値を多面的・多角的に捉え、グローバル社会において自己の生き方と関連付けることができる力
学びに向かう力・人間性	伝統文化の継承・発展・創造に主体的・協働的に関わる力

４．取組の具体

(1) 生徒と能との距離を縮めるために

能楽は、室町時代から 650 年以上演じ続けられてきた日本を代表する伝統芸能であり、現代ではユネスコ無形文化遺産に登録され、世界でも高く評価されている。精選された動作や音楽が特徴で、観る人を幽玄の世界に誘う、大変美しく魅力的な伝統芸能である。しかし、生徒にとってはあまり馴染みがなく、「能面が怖い」「動きが少なく退屈」といった印象がある。生徒が能に主体的に関わり、真の魅力を理解するためには、能と生徒との距離を縮めることが必要であると考え、１学期から夏休みにかけて次のように取組を進めた。

まずは京都が発祥の地とされる「歌舞伎」を歌舞伎の劇場である南座で鑑賞し、様々な日本伝統芸能の存在を知るところから学習を始めた。華やかな舞台や衣装、演技の様式美を劇場で味わうことで、日本の伝統芸能に関心をもつきっかけとすることができた。その後、観世流能楽師 吉浪壽晃氏のご協力のもと、能楽についての講演を行い、能楽の歴史、舞台、音楽について学んだ。生徒たちは、講演を聴いた後、「歌舞伎とは違う感情の込め方が、魅力だと思った。」「観る人のイメージを大きくふくらませていく芸能であることを知った。」「非現実的なものもあって、余韻に浸れそうな感じがした。」「昔ながらの伝統芸能である能が守り継がれている意味がわかったように思う。」等と振り返っていた。歌舞伎と能楽とを比較することで、能楽の特徴やよさをより深く感じ取ることができた。

【講演「能楽を学ぼう」】

７月には、京都にゆかりの深い武蔵野坊弁慶が登場する能「船弁慶」を教材に、歌唱と鑑賞とを１つの題材として構成した授業を行った。歌唱では、「謡」の謡い方の特徴への理解を深めたうえで、登場人物の心情に合った謡い方を工夫する活動に取り組んだ。鑑賞では、“囃子の各楽器の音色同士の関わり”や、“囃子の音色と謡の声との関わり”に注目して聴き、能特有の研ぎ澄まされた表現を味わう活動に取り組んだ。歌唱での十分な体験を生かして鑑賞することで、日本伝統芸能としての能のよさや美しさを味わうことができた。

夏休みには、能楽の歴史や舞台、衣装や音楽など、自分が知りたいことについて、書籍やインターネットを使った情報収集に取り組んだ。夏休み明けに生徒それぞれがまとめたものを校

内に掲示し、お互いに交流する機会をもった。このことで、新たな気づきを多く得ることができ、能楽についての知識が深まっていった。

このような学習を積み重ねることで、能について興味・関心が高まる様子が見られ、生徒と能との距離が縮まっていった。

(2) 地域ゆかりの能「舎利」を題材として

2学期からは、地域ゆかりの能「舎利」についての学習を進めた。能「舎利」は、仏舎利を拝むために泉涌寺にやってきた旅僧の前に現れた里人が、足疾鬼に化けて仏舎利を奪い、それを韋駄天が追いかけて仏舎利を取り返すという物語である。

【泉涌寺　大門】

まず、授業で能「舎利」の物語や由来について学習した後、泉涌寺を訪れた。僧侶から泉涌寺の歴史、文化財や建造物について、能「舎利」についての解説を聞かせていただいた。生徒たちは、熱心に解説を聞いていた。その中で、能「舎利」の舞台となった舎利殿（非公開）を見学させていただくことができた。物語の舞台に身をおき、その場に流れる空気を感じながら物語の時代に思いを馳せる生徒や、仏舎利塔や韋駄天像（重要文化財）をじっくりと見て物語の世界を想像する生徒の姿が見られた。泉涌寺は、本校の東学舎から徒歩5分以内に位置しているが、この日初めて訪れたという生徒も多くいた。自分たちの暮らす地域に、このような寺院があると知れたことも、とても意義深いことであった。

【泉涌寺　舎利殿】

泉涌寺で学んだことを振り返り「舎利」について理解を深めた後、年度当初より取組に関わっていただいている観世流能楽師 吉浪壽晃氏のご指導のもと、「舎利」の謡の一節を習得する活動に取り組んだ。日本の伝統音楽においては、師匠の演奏を真似ることが芸の伝承の方法の1つである。生徒もその方法を体験できるよう、能楽師の声を聴き、発声や謡い方を真似て謡う活動を繰り返し行うことで習得を目指した。最初はなかなか声が出なかった生徒も、能楽師の声を真似て何度も謡い、専門家からのアドバイスをいただくうちに、謡の魅力に引き込まれるように声を出す姿が印象的であった。

【謡の授業】

(3) 東山泉版大連吟「舎利」

習得した謡を発表する機会を、本校の研究報告会（令和4年11月3日）のプログラムの1つに設定した。能について生徒がこれまでに学んできたことをプレゼンテーションすると

【生徒制作のイラスト】

ともに、8年生全員で謡う「大連吟」という形で能「舎利」の謡を披露することとした。発表に向けて生徒から実行委員を募り、実行委員会を中心に取組を進めた。それぞれの得意なことを生かした役割を担うことで、生徒一人一人が主体的に活動できるようにした。

【選抜メンバーの練習】

発表に向けての準備を始めてからは、授業時間内だけでなく休み時間に謡の練習する生徒も見られるようになった。特に、選抜メンバーとなった生徒たちは、1人で謡う部分や少人数で謡う部分を担当し、熱心に練習に取り組んだ。謡を始めた頃とは比べ物にならないほど、謡らしい発声で豊かに表現する生徒の姿が見られた。

【東山泉版大連吟「舎利」】

研究報告会当日は、多くの来校者の方々の前で、堂々と発表することができた。大連吟では、声と心を合わせた情感あふれる表現で、大きな感動を呼んだ。コロナ禍の影響で、ここ数年このような発表の機会に恵まれなかった生徒たちは、想像以上に緊張した様子であったが、発表後には学年の仲間との一体感や大きな達成感を味わったという声を聞くことができた。発表後の振り返りには、「発表を終えて、能についてもっと知りたいと思った。」「能を身近に感じ、自分で謡うようになり、それを観てもらって、能を学ぶ前と後で知識も能への見方や感じ方も変わったなと思った。」といった、次の学びへの意欲が感じられる記述も見られた。

(4) 学びを深める鑑賞会

12月には、能楽堂「嘉祥閣」を訪れ、これまでの学びをさらに深める鑑賞会を行った。実際の舞台を目の前にして、能舞台の特徴や能楽堂の歴史について話を聞かせていただいた後、吉浪先生と一緒に、これまでに学習してきた謡を謡った。生徒の謡に合わせて仕舞を演じていただいたり、囃子の演奏に合わせて謡わせていただいたりと、大変貴重な体験をさせていただいた。能楽堂の響きや、謡の節の間に心地よく鳴る鼓の音色などを全身で感じ取りながら謡っているうちに、8年生の声がどんどん豊かな響きになっていった。

【囃子に合わせて】

素晴らしい体験の後には、能「舎利」の後半部分を鑑賞した。物語の背景や内容、登場人物の想いをしっかり理解している生徒たちは、身体を前に乗り出すようにして熱心に鑑賞し、能の魅力をたっぷりと味わっていた。「舎利」が終わった後、

静寂を保ってその余韻を味わっている姿が印象的であった。

以下、生徒の振り返りからも、能の真の魅力や社会での価値に多くの生徒が気付いたことが見て取れる。

【能「舎利」】

■舞台の話を聞かせてもらったあとに、舞台の下や背景を見て、お客様や演者のための工夫がたくさんほどこしてあることを体感したと同時に、今の形になるまでの長い歴史を感じた。また、それらの工夫と謡や囃子の独特の響きを今までに感じたことがなく、実際の音の迫力と伝統に感動した。授業で映像を見たときと、実際に見たときでは音の聴こえ方も演者の動きも違って見え、「能」の魅力を感じた。

■これがかつて泉涌寺で催された「能の音楽」なのだと、改めて気付いた。これを私たちは自身で謡うことにより、「能」をじかに感じることができたので、もし私が他の学年や地域の方に感じたことを伝えるならば、650 年の積重ねでできた「能の音楽」の素晴らしさである。あの四つの楽器（笛・小鼓・大鼓・太鼓）が奏でられた瞬間、自分たちの謡が急に一つの「音楽」になったと実感できた。

(5)「みんなで『舎利』を謡おう！」プロジェクト

3 学期には、「みんなで『舎利』を謡おう！」プロジェクトとして、オリジナルの謡本やプロジェクト動画の作成に取り組んでいる。これまでに学んだことや感じたことを生かし、学校や地域に能の魅力を広められるよう構成や表現を工夫して、謡本や動画を作成している。学校や地域の多くの人々に、地域ゆかりの能「舎利」の一節を謡えるようになってもらえるよう、意欲的に取り組む姿が見られる。

５．おわりに

地域の特色を最大限に生かし、能楽師の協力を得て、本物に触れることを大切にした数多くの体験を通して、多くの生徒が日本伝統文化への理解を深めることができた。また、地域の方々も含めた他者との関わりを大切に、「能」をテーマに一連の学習活動に協働的かつ探究的に取り組むことを通して、日本伝統文化の本質的な価値について、自分の生き方と関わらせながら考える力を育成することができたと考えている。また、教職員がこの取組を通して、教科横断的な視点に立った資質・能力の育成を強く意識し、教育実践に取り組むようになったことも成果であるといえる。今後も、カリキュラム・マネジメントの充実を図り、生徒の将来の生き方に繋がる伝統文化教育に取り組んでいきたいと考えている。

令和４年度修了論文題目一覧

授 業 力 高 度 化 コ ー ス

伊藤　穂乃花

選択を取り入れた教材研究のモデル化
―小学校理科の授業実践を通して―

今井　睦予

中学校数学の授業におけるグループ学習のあり方
―生徒の考えを手がかりにして―

岩村　空

小学校道徳科の終末の段階と終末への道筋を検討
―教材「手品師」の授業実践を通して―

上野　惟

これからを生きるための「歴史総合」
―歴史学の成果を生かして―

川端　克弥

PDCA サイクルにもとづいた「授業省察」について
―「授業省察」を目的とした校内研修とリフレクションシートの検討―

河村　優弥

産業学習において児童の科学的理解を促す手立て
―「工夫と努力」の情意面に着目して―

木村　夏子

数学と読解力

斉藤　瑞希

生徒の発言を引き出す教師の働きかけ
―「発問」研究を中心に―

榊本　斎

単元を通した学習課題を意識するためのICTを取り入れた思考ツールの活用
―小学校４年社会科『用水のけんせつ～琵琶湖疏水～』において予想する活動の充実を目指して―

高橋　菜恵

単元の導入における教材設定について

―日常との関わりに注目して―

田邊　温希

学習意欲の向上に関する一考察

―生徒が勉強を通じて求めているものを手掛かりに―

谷口　貴司

市民的資質の育成を目指す歴史総合の授業

―「言説」を用いた単元計画を通して―

東　俊克

社会科が育成すべき資質･能力上に見出せる『社会科単元の全体像』の考案と、

それを踏まえた中学社会科の単元構想

―学習指導要領の改訂に伴って明らかとなった「社会科の責務」を手がかりとして―

東村　誓太

道徳の授業における児童の「主体的な学び」を促す発問の構成

―「自分事」と考えることに視点をおいて―

廣中　三春

実生活に活かせる保健授業を目指して

―「ロイロノート」と「学び合い」を組み合わせた実践―

清水　瑞穂

「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法の検討

船山　雅俊

地理を学習する意味を実感する高校の授業実践

―景観の前後比較を手がかりに―

松盛　智紀

教員の意図と生徒の学習のズレを小さくする授業方法について

―生徒が重要と感じた「知識」に関する調査結果を基に―

元上　裕貴

防災教育ならびに高等学校国語教育における「クロスロード」の意義

森口　菜美

日本語指導が必要な中学生が在籍する学級での英語科の授業における課題

山口　岳陽

日本史探究における学習方法の提案

―「もしも」を取り入れた歴史学習について―

大井　櫻子

小学校社会科において「合理的意志決定能力」の育成を目指す単元開発

―「知識構成型ジグソー法」を活用して―

生徒指導力高度化コース

伊丹　優貴

掃除の協力行動促進に必要なこと

―行動経済学の視点から―

鵜飼　彩音

子どもとの関わり

―叱り方・ほめ方に着目して―

逢坂　祐衣

自己否定感と自己受容の組み合わせがレジリエンスに与える影響

―小学校高学年を対象として―

加藤　潤

令和の日本型学校教育に関する一考察

―数学における指導の個別化に焦点を当てて―

金岡　美帆

通常学級における日本語指導が必要な児童への支援のあり方

―京都市日本語指導担当教員へのアンケート調査分析より―

小林　千紘

同調圧力が自己肯定感と居場所感に与える影響

澤井　俊憲

教育委員会の法務相談体制に関する一考察

―スクールロイヤー制度に着目して―

重田　鮎美

教師が行う非言語の働きかけによる、児童生徒の気持ちの変化と対人不安傾向の関連

―小学３年生から中学２年生の児童生徒を対象とした、委員会・係決めの場面設定より―

髙橋　善希

小学校高学年の評価懸念と友人とのつきあい方の関連

―同調・防衛的な関係に着目して―

羽木　雄亮

不登校支援に関する一考察

―フリースクールの財政面に焦点を当てて―

花登　淳平

定時制高校におけるキャリア教育

―夜間定時制高校のキャリアプランニングに焦点を当てて―

福田　剛之

小中学校教員の「特別支援教育」に関する意識構造の一考察

―教員のキャリアと教育観―

本多　拓真

小学校高学年におけるエージェンシーとコンピテンシーの関連

安田　菜摘

男女共同参画社会に関する考察

―学校管理職に焦点を当てて―

山口　安奈

児童相談所一時保護所における学習支援の考察

―学習サポーターへの半構造化インタビューから―

山口　友彰

「雰囲気の良い学級」についての考察

―生徒と教師それぞれの認識にズレはあるか―

山崎　純

学力格差に配慮した授業づくり

―中学校英語に焦点を当てて―

米澤　柊

安心できる教室環境づくり

―物理的側面からの考察―

学校経営力高度化コース

今邑　宏樹

校内研修で若手教員を育てる組織づくり

～理科専科実施校における理科教育推進の在り方～

中核教員･リーダー教員養成コース

赤神　誠

京丹後市保幼小中一貫教育における学校運営協議会と地域学校協働活動の実際と今後の在り方について

大﨑　浩

教頭職の魅力・やりがいに関する考察

―中学校教頭の「自己体験」に着目して―

黒木　紗和子

小学校教員が抱く学年イメージについての研究

―学年配置との関連を中心に―

後藤　隆太

「自己開示」を通して見えてきた勤務校の組織課題とその克服

―実習と省察の往還を繰り返す中で―

齋藤　明良

中学校における校則の在り方に関する研究

畑　尚吾

小学校学年組織内で起こる「葛藤」についての研究

―学年会、参与観察、インタビュー調査からの考察―

藤本　陽一

中学校における多忙感・負担感と働きがいの関係

―大規模中学校における実態調査を通して―

星川　和也

小学校教育において子どもたちの多様性をどのように受けとめていくのか

―教職員アンケート調査から見えてきた視点―

森永　正宏

働き方改革における勤務校の実態と教員の意識

～勤務校の教員のアンケート結果をもとに～

山口　将司

5-4 制施設併用型義務教育学校の可能性と課題

若松　俊介

教師の「個別最適な学び、協働的な学び」が実現する学校組織づくり

―「問い」が学びにつながる条件―

令和４年度　行事及び活動報告

連合教職実践研究科

＜前期＞

４月

＊教職専門実習Ⅱ開始（６日）
＊入学式（７日）※規模を縮小し学科等単位で実施
＊前期授業開始（１２日）
＊学校臨床専門実習Ⅰ（水曜実習）開始（２７日～）
＊連合教職大学院　新入院生歓迎会　※今回は中止

５月

＊教員採用試験個人面接セミナー（８回実施）開始（１２日～６月３０日）
＊日本教職大学院協会総会（１３日）※Zoom 開催
＊１次試験対策セミナー（第１回A）（２５日）
＊第１回大学院（学校臨床力高度化系）オンライン相談会（２８日）
＊１次試験対策セミナー（第１回B）（３１日）

６月

＊第１回大学院説明会（於：京都教育大学）（１１日）
＊１次試験対策セミナー（第２回）（１１日）
＊１次試験対策セミナー（第３回）（１５日）
＊第１回連合教職大学院実務担当者会議（１６日）
＊授業公開特別週間（２７日～７月１日）

７月

＊第１回院生・教員連絡協議会（７日）
＊前期授業アンケート実施
＊第１回連合教職大学院構成大学・連携機関代表者会議（１５日）※対面・オンライン
＊令和５年度入学者選抜試験（７月選抜）（３０日）

８月

＊前期授業終了（２日）
＊７月選抜合格発表（５日）
＊２次試験直前対策セミナー（２回実施）開始（９日～１０日）
＊令和４年度教育研究会（修了生参加）・紫漣会総会（１１日）
＊第２回院生・教員連絡協議会（１１日）
＊学校臨床専門実習Ⅰ（集中実習）開始（２４日～）

９月

＊第２回大学院説明会（於：京都教育大学）（１０日）
＊中国教育研修旅行　※今回は中止

＜後期＞

１０月

＊日本教育大学協会研究集会（１日）
＊第２回大学院（学校臨床力高度化系）オンライン相談会（１日）
＊後期授業開始（３日）
＊学校臨床専門実習Ⅰ（水曜実習）再開（５日～）
＊授業実践力向上セミナー（４回実施）開始（６日～２７日）
＊令和５年度入学者選抜試験（１０月選抜）（２２日）
＊１０月選抜合格発表（２８日）
＊教職専門実習セミナー（連携協力校参加）（１９日）
＊第１回院生・教員交流集会（１９日）
＊上海師範大学教育学院大学院短期留学教育交流研修　※今回は中止

１１月

＊授業公開特別週間（２４日～３０日）
＊第３回院生・教員連絡協議会（１７日）
＊第３回大学院説明会（於：京都教育大学）（１９日）
＊授業公開特別週間（２４日～３０日）

１２月

＊第２回連合教職大学院実務担当者会議（２日）
＊日本教職大学院協会研究大会（於：福井）（１０日～１１日）※ポスターセッションはオンラインのみ
＊関東地区修了生懇談会　※今回は中止

１月

＊研究科院生アンケート、後期授業アンケート実施
＊修了論文報告審査会（２８日）

２月

＊第２回院生・教員交流集会（２日）
＊後期授業終了（３日）
＊令和５年度入学者選抜試験（２月選抜）（４日）
＊２月選抜合格発表（１０日）
＊連合教職大学院実践報告フォーラム（１１日）※対面・一部オンライン併用
＊教職教養対策セミナー（１３日～１６日）
＊第４回院生・教員連絡協議会（１６日）
＊教職実践スキルアップセミナー（２０日～２４日）
＊第３回連合教職大学院実務担当者会議（２２日）

３月

＊修了式（学位授与式）（２４日）
＊第２回連合教職大学院構成大学・連携機関代表者会議（２４日）※対面・オンライン

編　集　後　記

みなさま方のおかげで、京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報第 12 号を刊行することができました。ご協力いただきましたみなさまに心より感謝申し上げます。

本年度の特集論文のテーマは、「学校臨床力の向上を図る教育の成果と課題」です。2022 年度から、本学教職大学院は改組し、学校臨床力高度化系と教科研究開発高度化系の 2 系からなることとなりました。そこで今回の特集では、まず主に学校臨床力高度化系の取り組みの成果と今後の展望を報告することとしました。翌 2023 年度には、教科研究開発高度化系からも修了論文が発表されます。本年報も、次号以降より一層充実していくことでしょう。

2023 年 2 月に開催したフォーラムでは、「教職大学院における教育評価の力量形成」というテーマで講演とシンポジウムが行われました。長年教育評価研究を牽引してこられた田中耕治先生を講師にお迎えすることができ、改めて「評価」とは何なのかを見つめ直すことができる、たいへん充実した催しとなりました。シンポジウムでは、講演を受けて教職大学院教育での教育評価の力量形成について議論されました。教育評価の具体的な内実にまで迫ることで、奇しくも学校臨床力高度化系が追求する「学校臨床力」との共通性を見て取ることができたのではないかと思います。したがって、本年報の特集テーマとフォーラムには、通底するところがあると言えるでしょう。

今号では、2 本の論文を投稿いただきました。併せて、各コースから 1 本ずつ、修了論文も掲載しています。また、精華町立川西小学校・米澤正展校長、京都市立東山泉小中学校・岩田智典校長には、京都の教育に関する論稿を執筆いただきました。年報を通じて、教職専門実習等でお世話になっている京都府や京都市の学校とのつながりが深まり、連携が強くなることを願っております。

なお、今号から電子媒体のみの発行となっております。また改組に伴い、今号から次号にかけて編集体制および編集方針が一新される都合上、前号まで設けられてきたカテゴリーの一部をいったん中断する形となりましたことを申し添えておきます。再開の形も含め、模索の途上にありますが、新しい年報の在り方を検討してまいります。

最後になりましたが、修了生のみなさんが、今後も楽しみながら学びを継続し、成長してくだされば、そして年報がその刺激になれば、年報編集担当としてたいへん喜ばしく存じます。

（福嶋祐貴）

編　集　委　員

福嶋祐貴（編集長）・谷川至孝・新谷幸三・中下和之

京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報

（第 12 号）

令和 5 年 3 月

編集・発行　　京都教育大学大学院連合教職実践研究科

URL　https://www.kyokyo-u.ac.jp/sk_ss/rengou/

E-mail　renjimu@kyokyo-u.ac.jp

印刷・製本　　株式会社　コームラ

Bulletin of
United Graduate School of Professional Teacher Education
Kyoto University of Education Vol.12

Special Papers: Achievements and Challenges of Education for Improving Clinical Pedagogy

Shunta, TOKUNAGA　Kozo, SHINTANI
Practical analysis of teaching practice and reflection at the graduate school of professional teacher education: Looking at educational practice from inside and outside from multifaced and diversified perspectives.

Yutaka, KAKUTA　Yoichi, FUJIMOTO　Shunsuke, WAKAMATSU　Makoto, AKAGAMI
Significance of reflection using process records for improving clinical pedagogy: Self-reflection including teachers' subjectivity and group reflection meetings

Yuki, FUKUSHIMA　Hiroyuki, AOTO
Fostering ICT utilization teaching skills for advanced clinical pedagogy: A lesson design toward an interaction of theory and practice

Submitted Papers

Mitsutoshi, SABI　Development of a new system of the board of education in Osaka City: The mayor-led (politics-led) educational reform and the board of education

Mami, HATTORI　The relationship between attachment and the way of tuning "being with" children

Research Papers

Itsuki, SAKAKIMOTO　Use of thinking tools adopting ICT to raise awareness of learning tasks throughout a unit: Aiming to enhance the activity of anticipation in the 4th grade social studies class unit "the construction of water supply: Lake Biwa Sosui"

Masayuki, FUKUDA　A study of the structure of elementary and junior high school teachers' attitudes toward "special needs education": Teachers' career and views on education

Hiroshi, OSAKI　A study of the attractiveness and reward of the vice principal position: Focusing on the "self-experience" of junior high school vice principals

Follow-up Research　Kiyoshi, SAKO

Forum Practice Report

Lecture　Koji, TANAKA
Symposium　Kiyoshi, SAKO　Yuriko, KIYOMURA　Shunta, TOKUNAGA

Graduate Student Activities

Masayuki, FUKUDA

Summer Workshop Report

Shunta, TOKUNAGA

Reports of Education in Kyoto

Masanobu, YONEZAWA　Tomonori, IWATA

March 2023